

幽玄

題字

高秀秀信横浜市長

 横浜能楽連盟
会報 No.1

平成2年10月6日発行


 新堀豊彦
(会長)

「幽玄」の発刊にあたって

●新堀豊彦 横浜能楽連盟会長

「能」は世阿彌以来、様々な日本人の情念や心を、そしてドラマや踊りを幽玄の美しさに昇華して、今日まで演じ続けられて来たという、まさに私たちにとって、魂のふるさとともいえるべき存在ではないでしょうか。

科学技術文明の恐ろしいスピードによる進展やめまぐるしくかわる政治や経済の流れの中にあつて、人間が大きくゆがめられ変化しても一向に不思議ではないのに、「能」は、いさゝかも動ぜず、日本人の原点に創造された「美」をそのまま保持し、今日でも、りっぱに鑑賞に耐える、深遠な舞台芸術としての魅力を発散しています。

「能」を現代社会の中で、マインリテイにしてはならないと

いう気持ちで、私たち能・謡曲の愛好者たちは、第二次大戦後、いちはやく五流あいつどい能楽連盟を結成し、「横浜能」を実施し、素人衆の松舞台としての「五流合同謡曲大会」を主催して来たのであります。

またさらに、ほんものの「能」をより多くの市民の方々に、正しく鑑賞して頂くために、本格的な「能楽堂」を横浜に建設することを永年にわたって促進し（三年前に宮越記念久良岐能舞台が横浜市によって練習舞台として開設されているが、ようやく本年五月末、市議会において、西区掃部山公園内に「能楽堂」を建設することが決定し、平成六年までに完成の予定となりました）。

本連盟の四十年に及ぶ歴史において、いよいよこれからが、新たな飛躍の時であり、もつとも充実した時代の訪れを感じると共に、この機会に市内在住の勤の各流愛好者を網羅し、さらに鑑賞を好む一般市民の方々も含めて、「能」をより一層広く深く理解して頂くため愛好者の

縦横の連絡情報の中心として、この会報「幽玄」を発刊いたしますことにいたしました。


 上野初雄
(教育長)

「幽玄」の創刊によせて

●上野初雄 横浜市教育委員会 教育長

横浜能楽連盟会報「幽玄」の発行をお喜び申し上げます。

「能」はわが国が世界に誇る伝統的総合舞台芸術であり、国内ばかりか海外にも多くの愛好者を持ち、高い評価を得ています。

横浜市教育委員会では横浜能楽連盟との共催によって「横浜能」を昭和二十八年より毎年開催してきました。「横浜能」は毎年多くの観客を集めており、能に対する横浜市民の関心の高さがうかがわれます。

「能」を愛する市民の皆様によって組織された横浜能楽連盟が、「横浜能」の開催をはじめ「謡曲大会」の実施など流派を越えて活発に活動され、横浜の文化形成に大きくご尽力いただいておりますことに深く感謝申し上げます。

さて、横浜市では「よこはま21世紀プラン」に基づきまして、

日本の伝統的な芸術分野に対応した専門的な文化施設として、能楽堂の整備をすすめることにいたしました。整備にあたりましても引き続き皆様の温かいご支援とご協力をお願い申し上げます。


 堀内万紗子
(梅若会)

横浜能初期の思い出

●堀内万紗子 親世流梅若会 連盟副会長

十年一昔という言葉がありますが、それにあてはめて見ますと、横浜能は早や四昔前に近い頃に始まったので、今昔の思い出で、こゝまで育て、これら先人の御尽力も偲ばれます。

主人が古い番組を保存しておりましたので久し振りに開いてみました。私は梅若なので梅若関係のだけしか残って居りませんので、それを見乍ら記します。

第一回横浜能は第二回横浜市民文化祭特別参加として行われ、昭和二十八年十一月二十一日から二十三日迄三日間です。

た。観世、宝生、と続いて梅若は三日目で、梅若は先代の六郎先生、そのお父様の実先生も演能され、番組の終りには「下駄の方」は御草履を御支度願います」と書かれて、此の会場は今は無木造の国際文化会館で、市電長者町五丁目下車と記されています。当時は戦後八年目で焼跡の復興も進み、やっと古典文化を味わえる喜びを感じたものでした。此の席で私は、はからずも女学校二年先輩の方と出会い、此の御縁で私の仕舞人生も楽しくなったと思つて居ります。

第二回の横浜能は神奈川会館ホールでした。此の時は、第一部は愛好者の仕舞、第二部は職分の先生方の能や仕舞が行われ、此の第一部に若い私も長い袂で舞ったことを思い出します。第三回から県立音楽堂に場所を移し、以後二十五回までこゝで行われました。

この間、第六回の事でした。台風で豪雨になり、此の思い出話を今回再び恭行先生に伺ってみました。初番の「隅田川」には装束がまにあわず、しかも笠も笠もない袴能で演能されて、ギリ能の「狸々乱」の時には装束も間に合つて無事終わったことでした。此の為「隅田川」は更に陰となり「狸々乱」は一

層陽となって、そのバランスの良さは、お見所の私達に大きな拍手をもたらした良い思い出となって居ります。

待望久し 横浜能楽堂

●中島行雄

観世流
連盟常任理事

長い間横浜市民並びに愛好者各位が待望してきました横浜能楽堂は、市ご当局により平成六年までに掃部山公園内に建設される運びとなりました。誠にこの同慶に存じます。

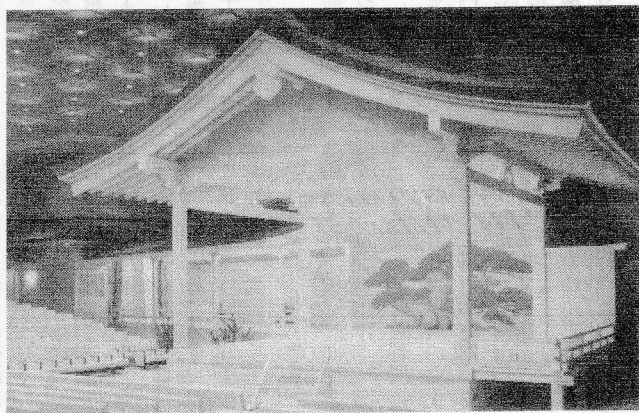
顧みますと、昭和五十二年、横浜能楽堂建設促進委員会が結成され能楽堂建設運動が組織的に展開されました。続いて昭和五十四年、旧加賀藩主前田家由縁の「染井能舞台」の鏡板など貴重な資材が愛好者より横浜市へ寄贈され、一段とその気運が高まって参りました。更に翌年には五万六千余名の建設嘆願の署名が集められ、市長並びに議会筋へ要望書と共に提出され本格的運動が開始されました。

「高承の通り」「能」は六百年以上の歴史と伝統を有する我国の代表的古典芸術であり、最近全国各地でいろいろな機会に演能され、又野外での「薪能」も盛大に催されております。一方国際的にも「能」は高い評価を得て海外公演が数多く開催され

ております。この様に国内でも能楽に対する関心が日増しに高まっている折柄、昭和五十八年、東京千駄ヶ谷に国立能楽堂が建設され、以来福岡、富山、奈良、彦根、岡崎、大分、広島（建設中）と各地に立派な能楽堂が次々と誕生致しました。

当地に於きまして、能楽堂建設運動の輪は次第に拡がり、横浜能楽堂建設促進委員会は、昭和五十九年、横浜商工会議所のご協力を賜わり、横浜能楽堂建設促進会（会長上野豊会議所会頭）と改名改組され、その会員数は法人個人合わせて百数十名に及び、強力な運動母体が確立され建設運動は一段と活発化されました。

市ご当局も漸く理解を深めて参り、具体的建設計画が台頭してきましたので、昭和六十二年、促進会は「横浜能楽堂建設基金」勘定を創設して、募金運動を展開し募金額一億円を目標として、地元法人筋愛好者諸団体を始め、県市民の皆様へご協力を呼びかけることとなりました。幸い関係各位の多大のご盡力により、八月末現在、応募者数一、三、四三名と予想を大幅に上廻る



ました大勢の皆様方のご要望にも応えてゆく所存でございます。写真は国立能楽堂（横浜能楽堂建設促進会常任幹事）

連盟の歩み

●田所義男

宝生流
連盟常務理事

故新堀源兵衛氏（宝生流）の後を受けて故庄司清夫氏（観世流梅若会）が会長に就任され各流家元のご理解とご協力を頂きながら第一部、第二部、第三部と三回に分けて二日間に亘り開催されてまいりましたが第三十四回（昭和五十九年度）には諸設の事情にて五流合同一回の公演となった。

それ迄は減収の為不足を生じた時などは連盟役員が補填して続けて開催して来て昭和五十九年に庄司会長ご逝去の後、小久保謙一氏（金春流）が会長となりました本年度補正予算の中に「横浜能楽堂建設基本設計等」三千七百万円を計上し、名実共に建設に向けて第一歩をふみ出す事となりました。

横浜能楽堂建設促進会は今後一日も早く募金目標を達成し、官民一体となって「国際文化都市よこはま」に相応しい格調高い能楽堂を建て、三百二十万市民の豊かな文化生活上の一翼を担い、ご支援ご協力を賜わり

と改めて感謝申しあげたい。第一回より第三十八回迄長い間には何回となく開催不能かと思われる時があつたが苦難をのり越えて多くの方々を支えられて継続されてきた。

小久保会長の急逝により新堀会長を中心として活発な歩みと連盟の強化充実、会員制度の確立、市、県、ご当局の補助金等の増額、横浜能楽堂も実現の運びとなった事は連盟に連なる方々の熱意の賜物であつたと考え

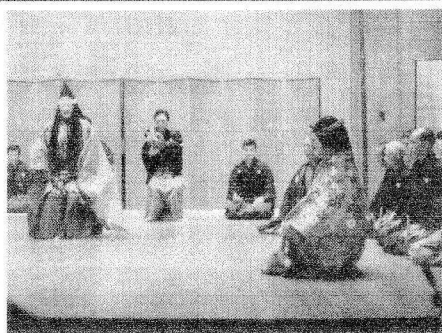
横浜での金春流の歩み

●副島為安

金春流
連盟常任理事

桜間弓川師門下の塚原実氏と、高瀬寿美之師門下の小川雅雄氏が横浜能初期の金春流のまとめ役でした。昭和初期、本田秀男師は戸部裁縫女学校で、高瀬寿美之師、守屋与四巳師は古河電工横浜工場で、先々代家元金春栄治郎師、現家元金春信高師は東芝川崎で指導に当たられました。

現在横浜在住の守屋師は少年時代より桜間弓川師の内弟子として修業した人で、昭和四十二年に重要無形文化財総合指定、日本能楽会々員となられ、金春会での演能の他に古河電工、横浜市役所、東芝川崎、鶴見など



「幽玄」について

●竹村洋子 喜多流 連盟常任幹事

に昭和五十八年より桜間金太郎師指導のもとに横浜桜間会が発足しています。

で同好会の指導に当られ、金春流神奈川聯合会を行い、県内在住同好者の交流をはかり、現在金春会内では長老の一人となっております。

同師は横浜能に第一回より本年まで殆ど毎年、仕舞・舞囃子・能等に出演しておられます。横浜能は第四回迄桜間弓川師が舞囃子を、以後第十五回まで守屋与四巳師が舞囃子を、その間第六回（開港百年記念能）に桜間竜馬師が舟弁慶の能を、第九回に守屋師が阿漕の能を勤め、第十六回清経（写真参照）より第三十二回までは毎年能を演じておられます。

なお御子息の泰利師は金春流職分として、五八年道成寺を披かれたほか、自宅並びに久良岐教室などで、仕舞や新人の養成に当たっておられます。この他

横浜に能楽堂が出来る……といふ諸先輩の熱気の中にあてふ。今「幽玄」の一号が発刊されるといふ。能を愛する人々のところが花を開かせやうとしてゐる。ヨコハマが成長してゆくその速度の中に古今東西の美しいものを蒐めて自身の血肉と成しているよろこびを感じると云へば大袈裟になるだらうか。横浜に於いては流派を超えた活動が極く自然に在り自流にこだわらない大らかな気風が特徴となつてゐて会員の親睦も殊の他和やかであることが素晴らしい。

昔、表の路を謡い乍ら歩く人があつた。得も云はれぬ節と声のさわやかさ……はつとして外に出たがすでに人影はなかった。

「横浜は凄い」といふ思ひが永く胸に点つて行手を明るくしてくれてゐる。

横浜は楽しい。今は亡き飯田九一師が話してくれたことがある。夜釣の時近くの人影がずつとぶつぶつ眩いている……それは佐藤惣之助だった。酒になつ

て梯子を朝までした、とか。背の高い村井米子さんに父弦斎の話をバス旅行でとなり合せて聞いたこともなつかしい。世界の蝶を恋人にしてゐる新堀会長の前の会長庄司先生はお馬流しの袴姿が印象深い。藁とは云へ走水へ去つてゆく姿は哀しい詩の一節の趣がある。数多の先人によつて培われた横浜の文化の一つの華として「幽玄」の第一号が出る。喜多流の先輩の坂本寿氏の一周忌にこの稿の話を頂いたのも不思議な気がする。肥沃な土に紅の芽を出して先人達の想を根としてこれからの人々が葉を広げ枝を伸ばしてゆく……久良岐舞台を下さつた宮越賢治氏もこの発展振りを天上より見て居られるだらう。

眩しい横浜の文化は能といふ古典を確りと組み込んで発展してゆく。神奈川新聞社もTVKも過酷な日々の作業の中で常にその舵の方向を平和と文化に向かつて荒波と斗つている。「幽

玄」も緑陰となり炉端となり縁ある人々のよすがとして花をつけ実を結んで港ヨコハマの煌きの一つの星になるだらう。その星に佳い香りと初々しさがいつまでもありますことを。

京浜地区における

『金剛流』の紹介

樋口寿男

金剛流 連盟常任理事

金剛流：関東東地区では馴染みは少ないかも知れませんが、
「幽玄」の初版というこの機会に、京浜地区における「金剛流」の現況の紹介をさせて戴きます。

◆『東京金剛会』

『金剛流二三世宗家：金剛右京先生』が、昭和十一年三月に亡くなられ、宗家が京都に移つてからは、東京では故奥野達也師が唯一人で（他にも仲間はいたが他流に移られた）弟子の育成に勤められ金剛流としての東京における牙城を守り、演能を

するための団体として、その地歩を固められ、現在では京都から移られた豊島訓三師の他に故奥野達也師の直弟子である田村信一郎師をはじめ多数の能楽師が所属しております。

◆『石川島金剛会』

故奥野達也師が戦前に石川島播磨重工（株）に在籍されていたところから、社内にはその師の薫陶を受けられた先輩諸氏により、会社の文化会の中のサークルの一つとして金剛流の謡曲部が誕生し、その中から師範も多数輩出し、現在では『東京金剛会』で開催される金剛流の『例会能』その他の『演能』には、数多くの所縁の先生方が出演をしております。

◆『横浜金剛会』

昭和三十八年に横浜の磯子に石川島播磨重工の横浜工場進出とともに転動してきた数名の同好者から始まりそれが次第に数十名にものぼる勢いとなり、金剛流の謡曲・仕舞等の稽古に励んで参りました。

昭和六十三年横浜能楽連盟会長の新堀豊彦氏の勧誘をいただき仲間入りさせて戴きました。

これを期に開かれた『横浜金剛会』として特徴ある、金剛流の謡曲・仕舞を趣味とする流友を市民の皆様から求めております。

第六回五流合同横浜謡曲大会のお知らせ

好評の各流アマチュア出演の五流大会は、第六回目を平成三年五月十二日（日）久良岐能舞台で行われます。
連盟参加の各流各グループで出演希望の方はお早目に各流役員を通じてお申し込み下さい。会の性格上、団体の出演のみに限ります。

小史

編集部

我々の大先輩は、実に明治二十五年六月、横浜伊勢山に能楽堂を建設し、市民に各流の能を見せたという。

しかし、まことに残念ながら、その舞台は大正十二年の関東大震災によって焼失した。

その後復興の動きはあったが、ついに能楽堂の形となつてはみならず、伊勢佐木町の野沢屋（現・横浜松坂屋）に特設舞台が設けられ、毎年正月劈頭、全国にさががけて、五流揃つての日数能が催され、能楽界に話題を呼んだという。

しかし第二次大戦は、その横浜における伝統文化伝承の灯をいったん消滅させたのであるが、横浜の根強い能ファン、謡曲愛好者の情熱は、戦後まもなく、中村桃山（横浜能楽連盟初代会長）氏の盡力によって、再びよみがえり、昭和二十三年七月十一日、まだ荒廃のどん底にあった横浜で、「横浜能楽謡曲連盟」として新発足したのである。場所は当時数少なかった料亭、西区紅葉坂の「おしろ」であった。（現在ではこの場所は公団住宅のビルになっている）

翌二十四年、二十五年の兩年

は、各流派素人衆の競演によるコンクール形式の謡曲大会が催された。これが契機となり、第一回横浜能が中区長者町五丁目にあった国際文化会館（ドレメ）の仮設舞台で、三日間に渡つて行われることになったのが、二十八年のことであった。市教育



第1回各流合同横浜謡曲大会

委員会の社会教育課の全面的バックアップ（遠藤要同課長）によって、横浜文化祭特別参加をめいうち、当時、観世・宝生の超一流のシテ方が出演され、スタートを飾るにふさわしい大舞台であった。

第二回横浜能は、翌二十九年、神奈川会館（それも今日ではとりこわされて存在しない。神奈川公園内のホール）で、初日「能・狂言のしるべ」（喜多・金春の舞囃子、宝生の映画「獅子の座」など）、第二日が梅若の能二番、

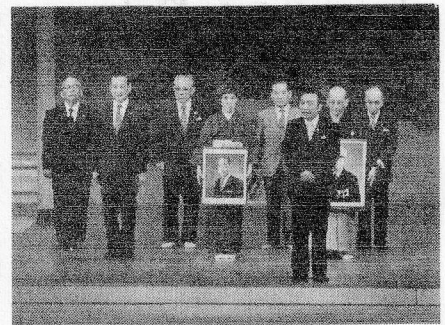
第三日目が各流派素人の合同謡曲と仕舞の回、第四日目が、観世の能二番という、四日間にも及ぶ、まさに大会と呼ぶにふさわしいものであった。

昭和三十年、神奈川県立音楽堂が紅葉ヶ丘に竣工すると、第三回以降は、しばらく定着し、第二十五回横浜能まで、こゝで行われた。二十六回以降は、隣の県立青少年ホールの方が、能の舞台がしつらえ易い構造で同時に敷舞台を同ホールが備えたため、三十四回まで、同ホールを利用して行われた。

たゞ第三十回の記念能は、県民ホールで三部にわけて盛大に行われたことも特記すべきである。

三十五回からは、新たに横浜市民文化会館・関内ホールに移り、同ホールの共催事業にもなり、また社会教育課から、教育文化センター文化事業課へ所管がかわり、神奈川芸術祭参加という形で、横浜市、神奈川県、の全面的御協力を頂き今日に至ったのである。

横浜能は本年（平成二年）実に三十八回目の演能を迎えるに至っているが、かつて中村桃山氏の描いた、横浜における能楽ファンの総集としての横浜能楽連盟は、その存在基盤が弱く、ましてや、いよいよ念願の、



「横浜能楽堂」の建設が本格化し、平成六年までには実現する見通しになった今日、「横浜能」だけでは連盟としてあまりにも消極的運営に過ぎるということとで、四年前から「五流謡曲大会」を復活させ、素人の競演会を催すことによって各流の連帯感を強化することになった。

また丁度この間、「宮越記念・久良岐能舞台」が市によって整備され（昭和六十三年）、同舞台の運営委員会の企画で、様々な催しが行われるようにもなった。さらに、「よこはま新能」（山下公園・市国際観光協会）、「掃部山新能」（西区）などが「能」に対する新しい関心を市民の中に生ぜしめ、「能面」を「うつ」グループも出来、能面展（作品展）がしばしば開催されるようになって、まさに、「能」の静か

なるブームを裏づけるような、活動が横浜市内で盛り上がりつつ来た。

そこで本連盟は、平成元年五月、組織強化のために、新しい規約を制定し、一大転機をはかると同時に、市内の愛好者の大同団結を目指し、名実共に日本最大の愛好者団体として新たな前進をはじめようとしている。（写真は、三十二回横浜能で五代会長就任挨拶）

それは「能楽堂」の完成へ向けて、また、その運営面における最大限の協力を目途しての新しい歴史への出発でもある。

▲参考▼

昭和四十三年十一月

横浜文化賞（団体） 受賞

平成元年六月

横浜市長賞（団体） 受賞

初代会長 中村桃山（観世）

二代会長 新堀源兵衛（宝生）

三代会長 庄司清夫（観世流 梅若会）

四代会長 小久保謙一（金春）

五代会長 新堀豊彦（宝生）

横浜能楽連盟に対する
ご意見は、
横浜市教育局文化センタ
ー文化業務課、または
各流役員へ